立　正　観　抄　　文永一二年二月　　五四歳

日　蓮　選

法華止観同異決

当世天台の教法を習学するの輩、多く観心修行を貴んで法華本迹二門を捨つと見えたり。今問ふ、抑観心修行と言ふは天台大師の摩訶止観の説己心中所行法門の一心三観・一念三千の観に依るか、将又世に流布せる達磨の禅観に依るか。若し達磨の禅観に依るといはゞ、教禅とは未顕真実・妄語方便の禅観なり。法華経妙禅の時には正直捨方便と捨てらるゝ禅なり。祖師達磨禅とは教外別伝の天魔の禅なり。共に是無得道・妄語の禅なり。仍って之を用ふべからざるなり。若し天台の止観の一心三観に依るとならば止観一部の廃立、天台の本意に背くべからざるなり。若し止観修行の観心に依るとならば、法華経に背くべからず。止観一部は法華経に依って建立す。一心三観の修行は妙法の不可得なるを感得せんが為なり。故に知んぬ、法華経を捨てゝ但観を正とするの輩は大謗法・大邪見・天魔の所為なることを。其の故は天台の一心三観とは、法華経に依って三昧開発するを己心証得の止観と云ふ故なり。

問ふ、天台大師の止観一部並びに一念三千・一心三観・己心証得の妙観は、併ら法華経に依ると云ふ証拠如何。答ふ、予反詰して云はく、法華経に依らずと見えたる証文如何。人之を出だして云はく「此の止観は天台智者の己心中の所行の法門を説くなり」と。或は又「故に止観に至って正しく観法を明かす、並びに三千を以て指南と為す。乃ち是終窮究竟の極説なり。故に序の中に説己心中所行法門と云へり。良に以有るなり」文。難じて云はく、此の文は全く法華経に依らずと云ふ文に非ず。既に説己心中所行法門と云ふが故なり。天台の所行の法門は法華経なるが故に、此の意は法華経に依ると見えたる証文なり云云。但し他宗に対するの時は問答大綱を存すべきなり。所謂云ふべし、若し天台の止観、法華経に依らずといはゞ速やかに捨つべきなりと。其の故は天台大師兼ねて約束して云はく「修多羅と合せば録して之を用ひよ。文無く義無きは信受すべからず」云云。伝教大師の秀句下に云はく「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」云云。竜樹の大論に云はく「修多羅に依るは白論なり修多羅に依らざるは黒論なり」云云。教主釈尊云はく「法に依って人に依らざれ」文。天台は法華経に依り竜樹を高祖ともし乍ら経文に違し、我が言を翻じて外道邪見の法に依って止観一部を釈する事全く有るべからざるなり。問ふ、正しく止観は法華経に依ると見えたる文之有りや。答ふ、余りに多きが故に少々之を出ださん。止観に云はく「漸と不定とは置いて論ぜず。今経に依って更に円頓を明かさん」云云。弘決に云はく「法華経の旨を攢めて不思議・十乗・十境・待絶滅絶・寂照の行を成ず」文。止観大意に云はく「今家の教門は竜樹を以て始祖と為す。慧文は但内観を列ぬるのみ。南岳天台に洎んで復法華三昧に因って

陀羅尼を発し、義門を開拓するに観法周備す。若し法華を釈するには弥須権実本迹を暁了して方に行を立つべし。此の経独り妙と称することを得。方に此に依って以て観道を立つべし。五方便及び十乗軌行と言ふは即ち円頓止観は全く法華に依る。円頓止観は即ち法華三昧の異名なるのみ」云云。文句の記に云はく「観と経と合すれば他の宝を数ふるに非ず。方に知んぬ、止観一部は是法華三昧の筌蹄なり。若し斯の意を得れば方に経旨に会ふ」云云。唐土の人師行満の釈せる学天台宗法門大意に云はく「摩訶止観一部の大意は法華三昧の異名を出でず。経に依って観を修す」云云。此等の文証分明なり、誰か之を論ぜん。問ふ、天台四種の釈を作るの時、観心の釈に至って本迹の釈を捨つと見えたり。又法華経は漸機の為に之を説き、止観は直達の機の為に之を説くと如何。答ふ、漸機の為に説くは劣り頓機の為に説くは勝るとならば、今の天台宗の意は華厳・真言等の経は法華経に勝れたりと云ふべきや。今の天台宗の浅猿さは真言は事理倶密の教なる故に法華経に勝れたりと謂へり。故に止観は法華に勝ると云へるも道理なり道理なり。

次に観心の釈の時本迹を捨つと云ふ難は、法華経何れの文にか人師の釈を本と為して仏教を捨てよと見えたるや。設ひ天台の釈なりとも釈尊の金言に背き法華経に背かば全く之を用ふべからず。依法不依人の故に、竜樹・天台・伝教元よりの御約束なるが故なり。其の上天台の釈の意は、迹の大教起これば爾前の大教亡じ、本の大教興れば迹の大教亡じ、観心の大教興れば本の大教亡ずと釈するは、本体の本法をば妙法不思議の一法に取り定めての上に修行を立つるの時、今像法の修行は観心の修行を詮と為す。迹を尋ぬれば迹広し、本を尋ぬれば本高ふして極むべからず。故に末学機に叶ひ難し。但己心の妙法を観ぜよと云ふ釈なり。然りと云へども妙法を捨てよとは全く釈せざるなり。若し妙法を捨てば何物を己心として観ずべきや。如意宝珠を捨て貧窮を取って宝と為すべきか。悲しいかな、当世天台宗の学者は念仏・真言・禅宗等に同意するが故に、天台の教釈を習ひ失って法華経に背き大謗法の罪を得るなり。若し止観を法華経に勝ると云はゞ種々の過之有り。止観は天台の道場所得の己証なり。法華経は釈尊の道場所得の大法なり[是一]。釈尊は妙覚果満の仏なり。天台は住前未証なれば名字・観行・相似には過ぐべからず。四十二重の劣なり[是二]。法華経は釈尊乃至諸仏出世の本懐なり。止観は天台出世の己証なり[是三]。法華経は多宝の証明あり。来集の分身は広長舌を大梵天に付く皆是真実の大白法なり。止観は天台の説法なり[是四]。是くの如き等の種々の相違之有れども仍之を略するなり。又一つの問答に云はく、所被の機、上機なる故に之を勝ると云はゞ実を捨てゝ権を取れ。天台云はく「教弥権なれば位弥高し」と釈し給ふ故なり。所被の機下劣なる故に劣ると云はゞ権を捨てゝ実を取れ。天台の釈には「教弥実なれば位弥下し」と云ふ故なり。然るに止観は上機の為に之を説き、法華は下機の為に之を説くと云はゞ、止観は法華に劣れる故に機を高く説くと聞こえたり。実にさも有るらむ。天

台大師は霊山の聴衆、如来出世の本懐を宣べたまふと雖も、時至らざるが故に妙法の名字を替へて止観と号す。迹化の衆なるが故に本化の付嘱を弘め給はず。正直の妙法を止観と説きまぎらかす。故に有りのまゝの妙法ならざれば帯権の法に似たり。故に知んぬ、天台弘通の所化の機は在世帯権の円機の如し。本化弘通の所化の機は法華本門の直機なり。止観・法華は全く体同じと云はん。尚人師の釈を以て仏説に同ずる失甚重なり。何に況んや止観は法華経に勝ると云ふ邪義を申し出だすは、但是本化の弘経と迹化の弘通と、像法と末法と、迹門の付嘱と本門の付嘱とを末法の行者に云ひ顕はせんが為の仏天の御計らひなり。爰に知んぬ、当世の天台宗の中に此の義を云ふ人は祖師天台の為には不知恩の人なり。豈其の過を免れんや。夫天台大師は昔霊山に在っては薬王と名づけ、今漢土に在っては天台と名づけ、日本国の中にては伝教と名づく。三世の弘通倶に妙法と名づく。是くの如く法華経を弘通し給ふ人は在世の釈尊より外は三国に其の名を聞かず。有り難く御坐します大師を、其の末学其の教釈を悪しく習ひて失無き天台に失を懸けまつる、豈大罪に非ずや。

今問ふ、天台の本意は何なる法ぞや。碩学等の云はく、一心三観是なり。今云はく、一実円満の一心三観とは誠に甚深なるに似たれども尚是行者修行の方法なり。三観とは因の義なるが故なり。慈覚大師の釈に云はく「三観とは法体を得せしめんが為の修観なり」云云。伝教大師云はく「今止観修行とは法華の妙果を成ぜんが為なり」云云。故に知んぬ、一心三観とは果地・果徳の法門を成ぜんが為の能観の心なることを。何に況んや三観とは言説に出でたる法なる故に、如来の果地・果徳の妙法に対すれば可思議の三観なり。

問ふ、一心三観に勝れたる法とは何なる法ぞや。答ふ、此の事誠に一大事の法門なり。唯仏与仏の境界なるが故に、我等が言説に出だすべからざるが故に是を申すべからざるなり。是を以て経文には「我が法は妙にして思ひ難し言を以て宣ぶべからず」云云。妙覚果満の仏すら尚不可説・不思議の法と説き給ふ。何に況んや等覚の菩薩已下乃至凡夫をや。問ふ、名字を聞かずんば何を以て勝法有りと知ることを得んや。答ふ、天台己証の法とは是なり。当世の学者は血脈相承を習ひ失ふ故に之を知らず。相構へ相構へて秘すべく秘すべき法門なり。然りと雖も汝の志神妙なれば其の名を出だすなり。一言の法是なり。伝教大師の「一心三観一言に伝ふ」と書き給ふ是なり。問ふ、未だ其の法体を聞かず如何。答ふ、所詮一言とは妙法是なり。問ふ、何を以て知ることを得ん、妙法は一心三観に勝れたりと云ふ事を。答ふ、妙法は所詮の功徳なり。三観は行者の観門なるが故なり。此の妙法を仏説いて言はく「道場所得法、我法妙難思、是法非思量、不可以言宣」云云。天台云はく「妙とは不可思議・言語道断・心行所滅なり。法とは十界十如・因果不二の法なり」と。三諦と云ふも三観と云ふも三千と云ふも不思議法と云ふも、天台の己証は天台の御思慮の及ぶ所の法門なり。此の妙法は諸仏の師なり。今の経文の如くならば、久遠実成の妙覚極果の仏の境界にして爾前迹門の教主・諸仏・菩

薩の境界に非ず。経に「唯仏与仏、乃能究尽」とは、迹門の界如三千の法門をば迹門の仏が当分究竟の辺を説けるなり。本地難思の境智の妙法は迹仏等の思慮に及ばず、何に況んや菩薩・凡夫をや。止観の二字をば「観名仏知、止名仏見」と釈するも、迹門の仏智・仏見にして妙覚極果の知見には非ざるなり。其の故は止観は天台已証の界如三千・三諦三観を正と為す、迹門の正意是なり。故に知んぬ、迹仏の知見なりと云ふ事を。但止観に絶待不思議の妙観を明かすと雖も、只一念三千の妙観に且く与へて絶待不思議と名づくるなり。

問ふ、天台大師真実に此の一言の妙法を証得したまはざるや。答ふ、内証は爾なり。外用に於ては之を弘通したまはざるなり。所謂内証の辺をば秘して、外用には三観と号して一念三千の法門を示現し給ふなり。問ふ、何が故ぞ知り乍ら弘通し給はざるや。答ふ、時至らざるが故に、付嘱に非ざるが故に、迹化なるが故なり。問ふ、天台此の一言の妙法之を証得し給へる証拠之有りや。答ふ、此の事天台一家の秘事なり。世に流布せる学者之を知らず。灌頂玄旨の血脈とて天台大師自筆の血脈一紙之有り。天台御入滅の後は石塔の中に之有り。伝教大師御入唐の時八舌の鑰を以て之を開き、道邃和尚より伝受し給ふ血脈とは是なり。此の書に云はく「一言の妙旨、一教の玄義」文。伝教大師の註血脈に云はく「夫一言の妙法とは、両眼を開いて五塵の境を見る時は随縁真如なるべし。五眼を閉じて無念に住する時は当に不変真如なるべし。故に此の一言を聞くに万法茲に達し、一代の修多羅一言に含す」文。此の両大師の血脈の如くんば天台大師の血脈相承の最要の法は妙法の一言なり。一心三観とは所詮妙法を成就せんが為の修行の方便なり。三観は因の義、妙法は果の義なり。但因の処に果有り、果の処に因有り、因果倶時の妙法を観ずるが故に是くの如き功能を得るなり。爰に知んぬ、天台至極の法門は法華本迹未分の処に無念の止観を立て、最秘の上法とすと云へる邪義大いなる僻見なりと云ふ事を。四依弘経の大薩埵は既に仏経に依って諸論を造る。天台何ぞ仏説に背いて無念の止観を立てんや。若し此の止観は法華経に依らずといはゞ天台の止観は教外別伝の達磨の天魔の邪法に同ぜん。都て然るべからず。哀れなり哀れなり。

伝教大師云はく「国主の制に非ざれば以て遵行すること無く、法王の教に非ざれば以て信受すること無し」文。又云はく「四依、論を造るに権有り実有り。三乗の旨を述ぶるに三有り一有り。所以に天台智者は三乗の旨に順じて四教の階を定め、一実の道に依って一仏乗を建つ。六度に別有り、戒度何ぞ同じからん、受法同じからず、威儀豈同じからんや。是の故に天台の伝法は深く四依に依り亦仏経に順ふ」文。本朝の天台宗の法門は伝教大師より之を始む。若し天台の止観、法華経に依らずといはゞ日本に於ては伝教の高祖に背き、漢土に於ては天台に背く。両大師の伝法既に法華経に依る。豈其の末学之に違せんや。違するを以て知んぬ、当世の天台家の人々、其の名を天台山に借ると雖も所学の法門は達磨の僻見と善無畏の妄語とに依ると云ふ事を。天台・伝教の解釈の如くんば己心中の秘法は但妙法の一言に限るなり。然るに当世の天台宗の学者は

天台の石塔の血脈を秘し失ふ故に、天台の血脈相承の秘法を習ひ失ひて、我と一心三観の血脈とて我が意に任せて書を造り、錦の袋に入れて頸に懸け、箱の底に埋めて高直に売る故に、邪義国中に流布して天台の仏法破失せるなり。天台の本意を失ひ、釈尊の妙法を下す。是偏に達磨の教訓、善無畏の勧めなり。故に止観をも知らず、一心三観・一心三諦をも知らず、一念三千の観をも知らず、本迹二門をも知らず、相待・絶待の二妙をも知らず、法華の妙観をも知らず、教相をも知らず、権実をも知らず、四教・八教をも知らず、五時・五味の施化をも知らず、教・機・時・国・相応の義は申すに及ばず、実教にも似ず、権教にも似ざるなり。道理なり道理なり。天台・伝教の所伝は禅・真言より劣れりと習ふ故に、達磨の邪義、真言の妄語に打ち成りて権教にも似ず、実教にも似ず、二途に摂せざるなり。故に大謗法罪顕はれて止観は法華経に勝ると云ふ邪義を申し出だして、失無き天台に失を懸けたてまつる。故に高祖に背く不孝の者、法華経に背く大謗法罪の者と成るなり。

夫天台の観法を尋ぬれば大蘇道場に於て三昧開発せしより已来、目を開いて妙法を思へば随縁真如なり、目を閉じて妙法を思へば不変真如なり。此の両種の真如は只一言の妙法に有り。我妙法を唱ふる時万法茲に達し、一代の修多羅一言に含す。所詮迹門を尋ぬれば迹広く、本門を尋ぬれば本高し。如じ己心の妙法を観ぜんにはと思し食されしなり。当世の学者此の意を得ざるが故に、天台己証の妙法を習ひ失ひて、止観は法華経に勝り禅宗は止観に勝れたりと思ひて、法華経を捨てゝ止観に付き、止観を捨てゝ禅宗に付くなり。禅宗の一門の云はく「松に藤懸かる、松枯れ藤枯れて後如何。上らずして一打」なんど云へるは天魔の語を深く信ずる故なり。修多羅の教主は松の如く其の教法は藤の如し。各々に諍論すと雖も仏も入滅し教法の威徳も無し。爰に知んぬ、修多羅の仏教は月を指す指なり、禅の一法のみ独り妙なり。之を観ずれば見性得達するなりと云ふ大謗法の天魔の所為を信ずる故なり。然るに法華経の仏は寿命無量、常住不滅の仏なり。禅宗は滅度の仏と見るが故に外道の無の見なり。是法住法位世間相常住の金言に背く僻見なり。禅宗は禅は法華経の方便、無得道の禅なるを真実常住の法と云ふが故に外道の常見なり。若し与へて之を言はゞ仏の方便三蔵の分斉なり。若し奪って之を言はゞ但外道の邪法なり。与は当分の義、奪は法華の義なり。法華の奪の義を以ての故に禅は天魔外道の法と云ふなり。問ふ、禅を天魔の法と云ふ証拠如何。答ふ、前々に申すが如し。

立　正　観　抄